

79 ねが風景

《3》

街の地蔵堂

息づく“人情の輪”

オアシスを求め“拝み”に

会て広まった。中世に入つたころと期待され、毎月二十四日を縁日から庶民の間に伝わり、近世には「大塚民俗学会編『日本民俗事典』」から

地蔵院の節向かいに、井上さん(七〇)の家がある。大人の子供を育て、いまは代々続いた荒物店、店番をしながらの隠居の身分。ガラス戸越しに冬日を受けながら通りを見つめる、きんは言う。

を鉄道が走つて、いまでも汽車道というところですが、そこでよう事故があつて。鉄道の人が魔よけにお地蔵さんを建てたら、めっきりのうなつたという話や。ワシも昔人間で、毎朝、五円のおサイ銭あけて、マメでやらしてとお参りしとります。

地蔵院の中央に、高さ一・二メートル、モテ葉、カブラ、ホウレンソウが栽培されている。秋には菊。この正月、ソウニの中身は、この畑の作物で、残りは近隣の人に分けちまつた、と音次郎。電話で名高い愛知県瀬戸市赤う。

す。信仰は本来、自然発生的なもの。そういう民間信仰の形をそのままだけにしたいのです。そう言うオッさんの気の合った仲間の人、といつても老人だが横江音次郎(七〇)と夫婦は地蔵院のすぐ近く、駅前大通りの二階建ての家が並び、小さな(市道広井町線)に面した一角で「百姓」をやっている。歩道に面した約四〇平方メートルの土地にダイコン、モチ葉、カブラ、ホウレンソウが栽培されている。秋には菊。この正月、ソウニの中身は、この畑の作物で、残りは近隣の人に分けちまつた、と音次郎。電話で名高い愛知県瀬戸市赤う。

の右手に弘法大師と台座に刻まれた小さなもの。西部町内会長、横井正二(六〇)の妻久子(五七)と近くの岩井乃々(五七)、朝元ひさ子(五七)の三人が共同で昨年に掘えたもの。その手前、小さな重軽(おもかる)地蔵。これを持ち上げて、軽く感じれば願いがかなうという。お年寄りばかりではない。毎朝六時から七時ごろ、それに午後七時過ぎ、若い女性も男の人、この「重軽さん」を持ち上げたり、サイ銭を投げる人が絶え間ない。

院のオッさん、石田隆伸は三十七歳とまだ若い。駒込大を出て父親から院を継いだ。「無味乾燥な都会ですから、そのオアシスとして大切にしていきたいと思いま

日なが通りを見つめる井上さんは子供好きで、オッさんの長男一龍(三二)男正道(二七)の兄弟はすっかりついた「おばあちゃん子」。だが、都会の下町がどうでもよかったように、子供が若



市道沿いに立つ地蔵堂、街の人が次々に
拝みに来る(名古屋市西区名駅二丁目)

名古屋市区内、内町三丁目、いや、いまは名駅二丁目と住居表示は味気なくなつたこの町に、都会では珍しい「地蔵信仰」が生きていた。国鉄名古屋駅前の通りを北に約五百メートル。交差点の東南角近くに立つ地蔵院。正式には、昔ここに大きな榎(えのき)があったというので、一本榎地蔵院。もちろん、車はひっきりなしに通るのだが、輪ノ内界わい、この地蔵院を中心に、よくも悪くも下町の、細やかな人情が残されている。大みそかの夜、町の人が地蔵院に寄贈した盂盛一鉢足らずの小さな除夜の鐘が鳴ると、新しい年の無事を祈る人たちが、次々にお参りした。

『地蔵信仰は大森をもちて衆生の苦しみを除いてくれるものとして日本では平安末期から貴族社

(つづく)